Title	奨励についての感想
Author(s)	金子，晴勇
Citation	キリスト教と諸学 ： 論集, Volume23 : 211-215
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2827
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

奨励についての感想

金子晴勇

聖学院大学でわたしは過去一二年間に（その前の非常勤時代を加えると一三年になる）一二回の奨励を担当してきた。その内の一回は創立記念礼拝の講演であった。ここではその経験にもとづいた感想をいくつか述べてみたい。

わたしはこの大学に就任する前は国立大学の教師であった。そこではキリスト教のことは歴史的事実の他は語ることができなかった。したがって「隠れキリシタン」のような態度を強いられてきた。しかし聖学院大学はプロテスタントの精神基盤に立っているので、これまでは語るのを控えざるをえなかったルターの信仰についても講義できると思うと、とても幸福に感じた。

奨励の感想を述べる準備にさいしてわたしは手元に書き残しておいた奨励の原稿を集めてみた。奨励にはチャペルで行なったものが一二点あったが、それ以外に夏と冬のリトリートの晩祷で担当した奨励も三つあった。わたしはこれを反省の素材として気づいた点を述べてみたい。なお、これらの奨励は仮とじの冊子にまとめて聖学院大学における記念として手元にいつまでも保存しておきたい。

（一）奨励の主題はできるかぎり身近な生活経験に求めた。わたしは最初奨励をしたとき、「真理はあなたがたを自由にする」（ヨハネ八・三二）というヨハネ福音書の言葉につて釈義的に語った。その後、この奨励内容について

当時三年生であった赤田君（現在は牧師として東北の地にあって活躍している）に尋ねた。彼から奨励は抽象的ではなく、具体的な内容が好ましく、とくに小話や例話を採り入れなければならないことを教えられた。実際、福音書の中には伝説・語録・小話・たとえ話などが満ちている。この点は当時盛んに研究されていた福音書の「様式史」（Formgeschichte）研究によって解明されていたことでもあった。「小話」（Novelle）というのは短編小説のような短い話であって、イエスの手になる「良いサマリヤ人の話」とか「放蕩息子の話」などがこれに属す。またイエスの「たとえ話」にいたっては傑作ぞろいであって、民衆の理解を得るための驚嘆すべき手法であった。このことは大学の授業でも大いに生かすべきであると感じた。それでも奨励のための講話と教室での授業とは本質を異にしており、日常の講義とは違って毎年一回だけ担当する奨励はわたしには苦痛であった。講義では学生と一緒に探求している科学や学問を理性的な方法によって把握し、その法則の認識にまでいたるよう講義内容が準備される。もちろん芸術関係の講義では感性による理解の開発がなされるにしても、神の言葉を信仰によって聞いた上でその意味を伝える奨励とは本質的に異なっている。奨励には講義にない独特な緊張感がみなぎっている。これは日常的な意識とは質的に異なっている。この点は礼拝に参加した学生によっても敏感に感じ取られたようである。

（二）チャペルでの奨励は、教会における説教ではないとしても、その核心において「神の前」（coram Deo）という場で行なわれるように初めから設定されている。だから、わたしたちは聖書にもとづいて語らなければならないのであって、奨励者の世界観や人生観を述べることに終始すべきではない。チャペルは神が現臨されるところであって、その場にふさわしい態度が奨励をする者と聞く者とに求められる。それゆえ教師も学生も信仰をもって神に対向し、神を讃美し、神の御心を探求し、知り、悔い改め、心の慰めを受けることが礼拝において生じなければならない。これは人間的には原則的に不可能な事態であるから、わたしたちが奨励に当たっていつも当惑を覚える

のは避けがたいといえよう。

（三）「礼拝」は「神仏などを拝むこと」（広辞苑）と規定されている。英語では worship とも service とも言われるが、ドイツ語では Gottesdienst と呼ばれる。それは divine service と同じであるが、「神への奉仕」とも訳される。その内容は神の言葉を聞き、神のわざを讃美することである。主体的な近代人には礼拝を「神への奉仕」と捉えることが理解されやすい。聖学院のスローガンである servant leadership「奉仕者としての指導」もこれに由来するといえよう。しかし、ヨーロッパでは古代末期から礼拝は cultus Dei と呼ばれてきた。この用語は「神の耕作もしくは薫陶」（直訳）を意味し、そこには神が人間の心に働きかけ、わたしたちの心田を耕し、教育的に薫陶することによって神と人との一致に導くという考えが含まれている。したがって礼拝では神が言葉を授け、人がそれを理解すべく受容するという「授受の関係」が基本姿勢となっている。それゆえ人の声のみでは奨励は成り立たない。

（四）礼拝が神の働きを受容する場であるなら、この神のわざに奉仕することがわたしたちに求められる。しかし大学の奨励では語る者と聞く者とは「学問」という共通の場に立っていることを弁えるべきであろう。教師も学生もともに「学徒」なのである。それゆえ奉仕は教師と学生に共通な学問を通してともに神に向かうことに求められる。わたしの場合にはヨーロッパ思想史と人間学という学問を通して学生に関わることが求められていた。この点では同僚の諸先生の奨励を聞くのはとても参考になったし、また興味をいだいたことであった。ところが自分のゼミの学生を礼拝に誘ってみても、なかなかこの誘いに応じてくれないし、たまたまやってきた学生は授業におけるわたしと奨励するわたしとの態度の相違に気づくにすぎなかった。そこで一般の講義のさいにも奨励にはわたし自身の思想の核心が込められているから、礼拝に出席してレポートを書くことは講義の理解に役立つと誘い続けたことを記憶している。

（五）この一二年間に強く感じたことは、学生の間に世俗化が急速に進んでいることである。学生数の激減という少子化だけが問題なのではない。もっと深刻な問題は学生の宗教意識が希薄化しており、とりわけ礼拝に参加していない一般学生に世俗化が大きな影響を与えているといえよう。わたしが教師となった頃、大学はイデオロギー闘争の場であった。大学紛争時代はイデオロギー戦争の様相を呈していた。しかし東西の冷戦構造が解体すると、学生の間から思想的な関心や精神的な探求が姿を消してしまった。そして学生たちは漫画ブームからケイタイ族に変身していった。もはや奨励が絶望的になるほど深刻な状況が出来（しゅったい）したのである。今日の利益社会に生きる学生は、ただ「金だ、金だ」と叫ぶシャイロック（シェイクスピアーの『ベニスの商人』に登場するユダヤ人）となる危険性に曝されている。イエスが「あなたがたは神と富とに仕えることはできない」（マタイ六・二四）と言っているように、拝金主義に転落した日本人の心は荒廃し、神に関心を寄せることは全くない。それでもわたしは心や良心のない人はいないと信じて、神の意識の根源を「霊性」に求めてきた。そのさい「良心」（conscientia）とは語源的にも「他のものに繋がる知」（con-scientia）であって、習俗や道徳と並んで神に繋がる意識であることを、つまり「神の前での意識」であると理解することができる。そのさい聖学院の理念に説かれている「霊性の教育」がわたしにとって大きな励ましとなった。

（六）霊性は人間の心に具わっている一つの作用である。それは宗教心や信心を意味する。心の認識作用には「感性・理性・霊性」が古来説かれてきた。人びとは感性をもって外的な世界の認識を、理性をもって科学的な世界と自己の認識を、霊性をもって神の認識を求めてきた。感性と理性が肥大化するに応じて霊性はおろそかにされ、覆いをかけられ、弱体化していった。大学における奨励はこうした恐るべき荒廃の影響下にある学生に語りかける状況にあるといえよう。実際、大部分の学生は社会の影響を大きく受けながらわたしたちのもとにきている。しかも

学生は心身の成長途上にあるがゆえに、その全人格的な発展を考慮しながら彼らに語りかけるのが教育的な奨励ではなかろうか。そのためには心身をもって行為する精神の中に霊性を覚醒しなければならない。だから心身に関わる以上、人間の自然本性とその現実の状況に深く関わらないような、孤立した啓示神学は問題であって、その語る内容は理念的になって学生の頭の遥か上を通過するだけではなかろうか。

（以上、二〇〇七年二月二二日に開催された「二〇〇六年度全学礼拝懇談会」における発表）